

# 日本医療秘書実務学会 第5回全国大会 基調講演および研究発表概要一覧

## 【記念講演】

講師：女優 小山 明子 先生

演題：妻として・女優として～夫・大島渚と過ごした日々～

## 【研究発表】

敬称略（名前の前の○印は、主発表者）

### 1 ○直江一彦（東京腎泌尿器センター大和病院）他 医師事務作業補助者に関するアンケート調査報告 ～どのような人材が求められているか～

2013年4月～5月にかけて「医師事務作業補助者」に関するアンケートを実施した。これまでの調査とは異なり、回答者の職種、職位や施設基準の有無を制限せずに、全国8558病院を対象とした。有効回答病院数は、施設基準を申請していない病院等88病院を含む263病院である。今回、施設基準を有している病院から得られた、医師事務作業補助者の外部活動の状況、どのような人材が求められているか、についてまとめた結果を報告する。なお、2013年度大会の続報として報告する。

### 2 ○西山良子（関西女子短期大学医療秘書学科医療秘書コース）他 診療報酬関連科目の指導方法における改善策

診療報酬関連科目に対する意識調査」を25年度に行った（医療秘書実務論集第4号に投稿）。その結果をふまえ、本稿では学生たちが診療報酬関連科目を苦手とする理由等を調査し、指導方法の改善策を考察する。また、自己学習を促すために自習課題を与えているがこの取り組みについても調査し、どのような成果や課題があるかを考察する。

### 3 ○黒野伸子（岡崎女子短期大学現代ビジネス学科）他 大学生に必要な保険請求の知識－査定事例を通じた学習内容の提案－

保険請求における査定は、医療機関の収入を圧迫する原因の一つである。保険医療機関では、査定を減らす努力をしているが、大学生が査定について学習する機会は少ない。発表者らは、2年間にわたって、大学生が査定について学ぶ意義を研究した。本発表では、その内容を以下のように報告する。研究1年目に査定事例の分類を通して、大学生に必要な知識を推測し、実習指導等で使用できる事例資料集を作成した。研究2年目は、さらに多くの事例を収集し、学生による分類から、査定について学生のうちに理解しておくべき知識を明らかにした。本研究により、今後の学生の査定に対する理解の一助としたい。

### 4 ○園田美樹（国立病院機構熊本医療センター）他 医師の医師事務作業補助者に対する評価と要望

当院は、現在24診療科に43名の医師事務作業補助者（以下、ドクター秘書）が配置されている。医師とドクター秘書に対し、アンケートを実施した。医師の96%が、ドクター秘書は事務作業軽減に「役に立っている」と回答した。また、医師の98%が、任せている業務に「満足している」と回答した。任せている業務は、助かる順に「診断書下書き」、「外来補助業務」、「診療情報提供書下書き、管理」、「症例登録」、「病棟補助業務」だった。

### 5 ○木村映善（愛媛大学医学部附属病院医療情報部）他 電子カルテの代行入力と承認の運用の検討

愛媛大学附属病院では特定共同指導にて代行入力に関する仕組みが不備である旨の指導を受けて、運用を検討した。医師が事前に代行入力を権限委譲する業務と職種を登録することとした。「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」にもとづき、自動承認機能の実装と、自動承認された診療録の正当性を裏付けるために診療録記載要項とシステム運用管理規程を改定した。運用開始後の状況と課題について報告する。

### 6 ○野田真喜子（名古屋大学附属病院医療業務支援課） 「医学知識をものにする」院内学習会への取り組み

採用当初に行う32時間研修以降の継続教育の課題に対し、院内学習会を開催し独自の学習資料を作成するという取組を始めている。医師による専門的な医学知識の講義を受けたあと、つつい受け身で終わってしまいがちな講義の中に各自見つけたテーマに基づいて調査をしレポートを作成する、そして全員のレポートを集めて継続学習の学習資料とすることにした。出来上がった学習資料を、医師へフィードバックしている。学習の成果を自分達の手で学習資料として作成することで、医学知識への探究心と向学心を高めることになり、同時に医師にクラークの熱意と姿勢を知ってもらう機会を得た当院の事例報告を行う。

### 7 ○大野由美子（明石医療センター医療秘書科副主任）他 医師事務作業補助者業務と新人教育への取り組み

平成25年度から医師事務作業補助者15対1算定当院では病棟クラークの他、外来で各診療科に専従で作業補助者を配置している。内科系、外科系のチーム体制で業務にあたっている。人員は医事科経験者は3名のみで医療知識に乏しい人員が多く、全員が同じレベルで医師の求める業務を行うためには32時間研修では十分でなく、独自での教育や勉強会による自己学習が必要であった。その取り組みについて。

<p><b>8 ○田中恵子（川崎医療福祉大学大学院）他</b>  <b>医事課職員における職務ストレスとバーンアウト傾向</b>  <b>-患者接遇への注目を背景として-</b></p> <p>医事課職員の患者接遇への注目を背景として、適切な接遇を阻害する要因と考えられる職務ストレス一経験とバーンアウト傾向について検討した。九州地区の計12病院の協力を得て、医事課職員への無記名での郵送調査（病院単位で配布し密封回収）を実施した。医事課の組織構成については各病院の担当者からも情報を得た。配布計236部、回収189部、有効回答182部（有効回答率77.1%）であり、職務ストレス一経験、バーンアウト傾向の程度、および両者の関連性を検討した。</p>
<p><b>9 ○赤木一博（一般財団法人河田病院医局）</b>  <b>（仮）単科の精神科病院において医局秘書が行う書類作成補助業務について</b></p> <p>現在、精神科医が携わる書類は多岐に渡り、その数も非常に多くなっている。それらの書類を当院での作成実績と共に紹介する。また、当院の医局秘書が“医師事務作業補助者”として、どのように書類作成業務の補助を行い、どの程度、医師の負担軽減に貢献できているかについて、各医師が費やす書類作成時間を調査し報告する。</p>
<p><b>10 ○小林利彦（浜松医科大学医学部附属病院医療福祉支援センター）他</b>  <b>医師事務作業補助者の「生涯教育システム」確立に向けたモデル構築</b></p> <p>各病院において、医師事務作業補助者の採用にあたり、施設基準としての「32時間以上の研修」は行われているが、その後の継続的な教育や研修システムなどは確立していない。各種診断書等の作成だけでなく、より専門的な作業スキルを獲得するためにも、系統的な生涯教育システムの整備が期待される。今回、静岡県内の医師事務作業補助者を対象に、生涯教育システムの確立に向けたモデル構築を試みたので報告する。</p>
<p><b>11 ○西川三恵子（名古屋経営短期大学）他</b>  <b>本学における医療事務教育とインターンシップについての現状と課題</b></p> <p>内閣府が平成24年に「若者雇用戦略」として挙げている項目の中に、インターンシップ教育の推進による充実したキャリア教育の支援策などが提言されており、本学においても「インターンシップ」（実習1単位、開講時期：1セメ・2セメ）の科目を導入している。本発表は昨年度に医療事務の現場でインターンシップを行った学生の振り返りを基に、本学の医療事務フィールドカリキュラムについて若干の考察を試みたものである。</p>
<p><b>12 ○片田桃子（川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療秘書学科）他</b>  <b>医療秘書・医療事務職における多職種連携教育の現状</b>  <b>-保健医療福祉専門職養成校における多職種連携教育の実態調査から-</b></p> <p>文部科学省から三重大が委託された「地域の医療・介護を支える『多職種連携力』を持つ中核的専門人材育成プログラム開発」事業の中で、保健医療福祉専門職養成校における多職種連携教育の実態に関する全国調査研究を実施した。本発表では、その調査から医療秘書・医療事務職養成校から得た回答結果について発表する。</p>
<p><b>13 ○森靖之（高松短期大学秘書科）他</b>  <b>秘書科実践型カリキュラムの再構築による医療事務コースの新設について</b></p> <p>本研究では、高松短期大学秘書科において、平成25年度から新しく医療事務コースを設置したことについて、設置した趣旨、設置して1年が経過した現在の状況、今後の方向性について等を報告する。新設した医療事務コースでは、社会のニーズを様々な角度から分析してカリキュラムを再構築したため、現在および将来のニーズを満たすことができる実践型カリキュラムを備えたコースとなった。</p>
<p><b>14 ○佐藤麻衣（川崎医療福祉大学）</b>  <b>企業と病院における接遇教育</b></p> <p>接遇教育に関する文献には、例えば、ホテルやレストラン等の従業員、営業職、秘書職や看護職、介護職に代表される医療従事者の接遇等、各種職種が取り上げられている。その中でも特に、企業と病院を対象とする接遇に関する文献（研究）を目にする。そこで、本研究の目的は、企業と病院に焦点をあて、各接遇教育の現状を明らかにすることである。つまり、企業の営利組織人と病院の非営利組織人に関する接遇教育の共通点と相違点について言及するものである。</p>

## 【ワークショップ】

テーマ：「研究発表の基本を学ぶ」

講師：田中 伸代 氏（川崎医療福祉大学/日本医療秘書実務学会副会長）

研究を行うためには、事前の準備・計画が必要である。また、計画を実行し、まとめるにあたって、一定の手順がある。

今回のワークショップでは、先行研究事例の収集や、研究の計画、まとめ方などについて解説を行う。参加者による実践を含める予定である。